

翻訳——英語学から／へのアプローチ

——語彙の問題を中心に¹

輿 石 哲 哉

1. はじめに——翻訳についての英語学の研究の傾向

本論では、英語学からの翻訳に関するアプローチについて考察してみたい。筆者自身が網羅的に英語学の研究をしていないからそう思ってしまうのかもしれないが、極論を言うと、翻訳という分野について、英語学——特に日本の英語学——はこここのところ、取り上げない傾向にあるように思われる。

この一つの理由には、翻訳が、translation studiesとして独立に研究されるようになってきたということがある。²しかしまた別の大きい理由として、英語学、あるいは言語研究一般が、かなり最近、人文の領域を離れて、自然科学に近い方向性をとるようになった、ということがあると筆者は考える。

このような「英語学（あるいは言語学）の自然科学化」の全体的な流れの中で、英語学的人文的な側面がいかに翻訳についてアプローチしていくか、あるいは逆に、翻訳によって英語学のそのような側面にどのようなアプローチが可能となるか、ということ、語彙の問題を中心に本論で考察してみたい。しかし、その主題に入る前に、自然科学的な英語学が明らかにしたことについても簡単に触れておきたい。

2. 「自然科学的な英語学」が明らかにしたこと

「自然科学としての英語学」というのは一般的になかなか理解されにくい考え方であるが、例えば以下の(1)に顕著に見られるものである。

(1) 言語に対する他の様々なアプローチから生成文法理論を際立たせている

最も顕著な特徴は、それが言語学を、「自然科学」として捉えている点にある。

福井 (2001:4)

(1)に示されている「自然科学としての言語学」という見方は、米国の生成文法とよばれる言語学に顕著な見方であるが、特に1980年代以降、言語習得や認知科学的な色彩が強くなり、普遍文法が脳に存在して、その普遍文法の媒介変数を決定することで、英語とか日本語とかの個別言語を人間が習得する、という考え方が一般的になってきている。

これまで提案されてきた媒介変数の一つに、言語単位の主要部が、左右のいずれにくるか、というものがある。³ごく簡単に述べると、日本語の場合、例えば、「コーヒーを飲む」という動詞句において、主要部である動詞は右に位置しており、目的語はその左に位置して主要部の動詞を修飾している。しかし、世界の言語を調べてみると、「コーヒー」と「飲む」の位置が日本語の逆になるような言語も数多くあり、英語はその一つである。このような語順の上での日英の鏡像関係を例示してみると、(2)のようになる。

(2) 主要部前置言語 (英語) vs. 主要部後置言語 (日本語)

drink coffee	vs.	コーヒーを飲む
want to drink	vs.	飲みたい
in a cup	vs.	カップで

郡司 (1988: 26)

文の要素の順番という観点から世界中の言語を概観すると、日本語を含むSOV語順の言語は、世界の言語の4割。英語、中国語を含むSVO語順の言語は世界の言語の3割、ウェールズ語、ヘブライ語などのVSOタイプは2割であるという。宇宙人語は本論の考察の範囲を超えるが、郡司(前掲書, 29)は、かつてE.T.という映画について、ETが「故郷に帰りたい」という意味で述べたことばが、英語で(3a)、日本語字幕で(3b)になっていることを指摘した上で、宇宙人なのに、地球語の普遍性に従っているのが妙にひっかかったと指摘している。

(3) a. E.T. phone home.

b. E.T. オウチ デンワ.

郡司 (1988: 29)

地球上の翻訳の話に戻る。このような主要部の位置は、日・英の比喩のパターンについて、興味深い事実を示している。例えば、加島・志村 (1992) に(4)のような英語の比喩が出ているが、noiselessの部分为主题(S), as以下を比較句(C)とすると、英語の基本的なパターンはS-Cという順になり、主題が前に位置するという英語の主要部前置性に合致していることになる。これに対して、主要部後置言語である日本語で一般的に認められるのは、(5a)の語順である。

(4) Noiseless as a shadow—Anon.

Noiseless as a circulation of the blood.—Ibid.

Noiseless as a bright mist rolls down a hill.—Charlotte Brontë

Noiseless as fear in a wide wilderness.—Keats

Noiseless as the falling dew.—George MacHenry

加島・志村 (1992: 48)

(5) a. 影のようにひそやかで C-S

b. そのひそやかさは影に似ていて S-C

加島・志村 (1992: 49)

同書での加島の意見は、英語の語順をなるべく維持させる翻訳がよいとして、上記の(5b)のような訳をもっと見直すべきだというものであるが、それを受けて志村は、武田信玄の風林火山の一節を引いて、日本語でCが後置される(6b)に見られる表現は中国文の影響であると指摘し、「林のように静かだ」という元来の日本語の比喩のパターンを「静かなること林の如し」(武田信玄)という中国文のパターンと比較・対照している。

(6) a. 林のように静か C-S

b. 静かなること林の如し S-C

加島・志村 (1992: 57)

上記の事実は、自然科学としての言語学によれば、主要部後置言語である日本語が、主要部前置言語である中国語との長い接触の過程で、もともとC-Sが基調である日本語の文体の中にS-Cという比喩のパターンを取り込んできた、と解釈することが可能である。興味深いことに、英語の場合、C-Sという語順をとった同等の表現を思いつくことは容易ではない。これに対して、日本語の比較表現にC-S, S-Cという複層的な構造が存在するという事実は、他言語からの訳し分けの可能性が複数存在することを意味しており、明らかに日本語における豊かな翻訳の可能性を示していると考えられる。以上の議論は、最近の言語学の視点をとることによって、よりその言語の特徴が理解され、翻訳の可能性に関する理解が深まることを示している一例であると考えてよいだろう。

3. 語彙・語形成の問題

前節では「自然科学としての言語学」のアプローチについて触れてきた。以下では、本論の中心となる、人文的な英語学のアプローチとしての語彙・語形成の問題を考えていきたい。

ハンガリー生まれで、英国で教鞭をとったStephen Ullmannは、フランス語、英語、ドイツ語の語彙を比較して、フランス語、英語が慣習的、不透明な語を好む「語彙的」言語であるのに対して、ドイツ語は有契的、透明語を好む「文法的」言語であると指摘した。具体的な例は(7)に示してあるが、複合語、派生語とも、ドイツ語が意味、形式ともそれを構成している透明な単位に分かれるのに対し、英語とフランス語では、全く意味・形式の関係が不透明な形式に置き換わっていることが見てとれる。

(7) a. 複合語

独	英	仏
Schlittschuh ('sledge-shoe')	skate	patin
Schnittlauch ('cut-leek')	chive	cive
Fingerhut ('finger-hut')	thimble	dé
Handschuh ('hand-shoe')	glove	gant
Erdtail ('earth-part')	continent	continent

Wasserleitung ('water-conduit')	aqueduct	aqueduc
Kehlkopf ('throat-head')	larynx	larynx
Nilpferd ('Nile-horse')	hippopotamus	hippopotami

Ullmann (1962: 106-107)

b. 派生語

独	英	仏
Gesetz — gesetzlich	law — legal	loi — légal
Kirche — kirchlich	church — ecclesiastical	église — ecclésiastique
Bischof — bischöflich	bishop — episcopal	évêque — épiscopal
Stadt — städtisch	town — urban	ville — urbain
Mund — mündlich	mouth — oral	bouche — oral
Sprache — sprachlich	language — linguistic	langue — linguistique

Ullmann (1962: 109)

スイスの英語学者 Ernst Leisi は、英語・フランス語の場合、語彙が語源的な（音声上・意味上有縁な）語のグループに属さず、孤立していて他と関連性がないことが多く、このように語が無関連に向かう傾向とその結果生じた状態を分離 (dissociation) と呼んだ。彼によると、英語の場合、分離現象は特に形容詞と名詞の間に甚だしく、例えば、oral が mouth と関係があること、vernal が spring と関係があること、などを通常の英語話者は知り得ないという。⁵これらの形容詞は、かなり習得が困難な語彙で、「難解語」(hard word) と呼ばれている。米国の英語学者 Thomas Pyles は、このように分離状態にあり、多くが難解語となってしまった形容詞を、傍系形容詞 (collateral adjectives) と呼んでいる (Pyles and Algeo, 1968: 129)。「傍系」というのは、無関係も含め、語源的に名詞と形容詞が「直系」の関係ではないと理解してよいと思われる。傍系形容詞の例を(8)に挙げるが、括弧に示されているのは基語であると考えられる名詞である。

- (8) vernal (~ spring); paternal (~ father); ecclesiastical (~ church); canine (~ dog); bovine (~ cow); royal, regal (~ king); oral (~ mouth)

実際、英語の場合、上記のような分離語の習得は、教養ある母語話者としての知識の根幹に係わってくる。本論の趣旨から興味深いのは、(8)の傍系形

容詞に見られるような分離語の習得に着目した文学作品が数多く存在している、という事実である。Leisiは特にこの点に注目した作家として、Lewis CarrolとJames Joyceの二名を挙げる。(9)にまず、Lewis Carrolの*Alice in Wonderland*からの引用を示す。⁶

- (9) a. Alice had not the slightest idea what Latitude was, or Longitude either, but she thought they were nice grand words to say. (*The Annotated Alice*, 27)
- b. “I wonder if I shall fall right *through* the earth! How funny it’ll seem to come out among the people that walk with their heads downwards! The Antipathies, I think —” (She was rather glad there *was* no one listening, this time, as it didn’t sound at all the right word) ... (Ibid, 28)
- c. “I suppose they are the jurors.” She said this last word two or three times over to herself, being rather proud of it: for she thought, and rightly too, that very few little girls of her age knew the meaning of it at all. (Ibid, 144)
- d. “We call him *Tortoise* because he *taught us*,” ... (Ibid, 127)
- e. “... they’re called lessons ... because they *lessen* from day to day.” (Ibid, 130)

(9a)は、分離状態を全く知らないAliceの幼年期を示しているが、作品中でAliceは、その後(9b)に見られるような分離について自信のない状態を経て、(9c)のような、分離状態の習得を誇らしげに語る時期に至る。ここでAliceは、*juror* (バイシンイン) という語を用いた後、「でもね、*jurymen* (裁判人) でも十分なんだけどね (However, “*jurymen*” would have done just as well.)」と述べるが、これはなぜ不透明語を使うのか、というAliceの問いとして受け取ることが可能である。(9d), (9e)は、不透明な語に何らかのこじつけの説明を与えて透明語として捉えたい、という子供の欲求を示している。言語学において、例えば*asparagus*を*a sparrow grass*と解釈することを「民間語源」(folk etymology) というが、Aliceはこれらの例を、正に同音性に基づく民間語源で解釈しているとLeisiは述べる。

このような分離現象が基本的に観察されない形態的に透明なドイツ語のような言語において、そもそもこのような作品の翻訳が一体どうして可能になるのか、というのは興味深い問題である。Leisiによると、(9a)において「緯度」はドイツ語では*Breitengrad*, 「経度」は*Längengrad*と訳されるという。⁷

(9b)の antipathy に関しては、「地球上の真裏の点」である対蹠点 antipodes と間違えられているが、同音性に基づくシャレの要素があり、翻訳はほとんど不可能である。ドイツ語では、英語の不透明な antipodes に相当する Antipodische は一般的ではなく、三修社の和独辞典によると、Teile der Erde という透明な表現が一般的であるという。⁸

興味深いのは、日本語に翻訳される場合、この antipathy をいかに翻訳するかに関して、様々な翻訳者が名人芸ともいえるべき技量を発揮している事実である。実際、これは日本語の翻訳に特殊の世界であると筆者には思える。(9a-c)に挙げた英語の原文に対応する日本語への翻訳例を(10)に挙げる。

- (10) a. アリスは緯度^{いど}や経度^{けいど}ってのがなんなのか、まるっきり見当もついてなかったけれど、でも口にだすのにかっこいい、えらそうなことばだと思ったわけね
- b. 「このまま地球をドンッつきぬけて落ちちゃうのかな！ 頭を下にして歩く人たちのなかに出てきたら、すごくおかしく見えるでしょうね！ それってたとえば日本とかだとあるぜん人、だっけ——」（ここではだれも聞いている人がいなくて、アリスはむしろホッとしたんだ。だってどう考えても正しいことばには聞こえなかったし）
- c. 「あれがたぶん、陪審員^{ばいしんいん}ね」アリスはこの最後のことばを二、三回くりかえしました。ちょっと得意だったのです。だって、こんなに小さくてこんなことばの意味をぜんぶ知ってるなんて、あんまりいいはずだと思ったからで、[...]

(a, bとも山形浩生訳，オンライン版。

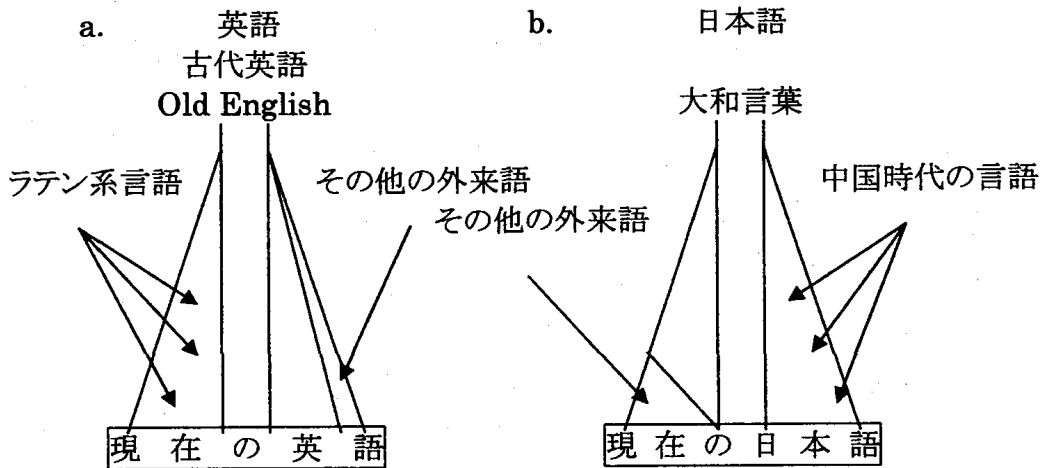
<http://www.genpaku.org/alice01/alice01j.html>)

(9b)の antipodes に対する訳だけでも手元の様々な翻訳を見てみると、「対席地」（柳瀬尚紀訳）、「反則地」（木下信一訳）、「対極の人」（大西小生訳）、「ツイセキチュウ」（矢川澄子訳）、「反対人」（高橋康成訳）、「あるぜん人」（山形浩生訳）など、百花繚乱の感がある。⁹このように数多くの翻訳が存在するというのは、一つには、前節で見たような日本語という言語の複層性が語彙構造にも存在しているという事実が支えていると考えてよい。

ここで、日英の語彙構造に注意を向けて見よう。日本語の場合、大和ことば

の古層の上に中国からの漢語の層、およびその他のいわゆる外来語の層がかぶったかたちで語彙全体の層ができ上がっている。これに対して英語でも、大和ことばに相当する古英語の上に、ラテン系言語の層、その他の外来語の層がかぶったかたちで語彙全体の層ができ上がっている。これについて、かつて加島 (1976: 196)は、(11)のような図にして示した。

(11)



加島 (1976: 196)

興味深いのは、(11a)と(11b)の間に並行性が見てとれることである。ドイツ語のような言語では、語彙が大部分単層的であるため、語彙が多層的である言語からの翻訳に際して、言わば「用いることのできる引き出しが少なすぎる」状態に陥ってしまうと考えられる。実際、英語の語彙自体の数の多さは同義語の多さにしばしば帰されるが、それが英語辞書の見出し語数の多さに端的に現れているとする見方もある。¹⁰

既出の Leisi の主張に戻る。彼は、英語とドイツ語を比較して、以下の点を指摘している。まず第一に、彼は、英語では古典語の学習は母国語教育の観点からドイツ語よりはるかに重要な意味を持っているという。かつて、英語の難解語の分離現象が英語話者の間に、言語的な障壁 (the language bar) を作ってしまったという、と指摘したのは Grove (1949)であるが、確かに、教育の程度と難解語の知識の間には強い相関関係があると思われる。なお余談になるが、最近英国で plumber 「配管工」という単語が Yellow Page に掲載されていないという抗議が相次いでいるというので、難解語の敷居も随分低くな

ってきていると思われる。

第二に、英語とドイツ語では、「詩的美」(dichterisch Schöne) に違いがあると Leisi (1974: 66)は指摘する。同書にある Joyce の *Dubliners* の *The Two Sisters* からの引用を(12)に、その日本語訳を(13)に示してみよう。

(12) Every night ... I said softly to myself the word *paralysis*. It had always sounded strangely in my ears, like the word gnomon in the Euclid and the word *simony* in the Catechism. But now it sounded like the name of some maleficent and sinful being. It filled me with fear, and yet I longed to be nearer to it... (James Joyce, *Dubliners*, p. 7. Granada Publishing)

(13) 毎夜僕はじっとあの窓を見上げては一人そっと麻痺という言葉をつぶやいた。僕の耳にはいつもそれがユークリッドのノーモンという言葉や教理問答のシモニーという言葉のように不思議な響きを与えた。しかし今、それが僕には悪さをする罪深い存在の名前のように聞こえた。それは僕を恐怖で満たしたが、それでも僕はより近くにいてその致命的な作用を見たいと思った。

(coderati 訳, オンライン版.)

<http://homepage3.nifty.com/coderachi/joyce/sist.html>

注目すべきことは、paralysis「麻痺」、gnomon「グノモン」、simony「聖職売買」というギリシア系の単語が、この作品の中では独特の意味・価値を持って用いられている、という事実である。(12)、(13)で第一人称で示される少年は、もちろんJames Joyce自身であるが、これらの語は、それらが支えのない、分離している語であるからこそ、不気味な魔力のある独自の生命を持つ語として使われている。原文中のparalysisには「麻痺」という漢字の訳語が当てられているが、gnomon, simonyについては敢えて「ノーモン」、「シモニー」と、カタカナ表記にすることで、原文の英語の不透明性、分離性による不気味で魔力のある響きまで伝えようとしていると考えられ、筆者の論旨からは実に興味深い。

第三に、支えのない、分離による語は、場合によっては學術の進歩にたやすく順応できる、という趣旨のことをLeisiは述べている。確かに、英語でgalaxyと言った場合、milkとかwayといった別個の事物との連想はなく、そ

の指示物を直接的に refer している感じがするが、ドイツ語の Milch-Straße の方は、不必要に Milch 「ミルク」、Straße 「通り」という連想が強く介入してしまう恐れがある。ドイツ語の場合、Nilpferd 「カバ」で「馬」(Pferd) を、Sauerstoff 「酸素」で「酸っぱさ」を思い浮かべることが多いようだが、例えば hippopotamus, oxygen の場合、分離されているために意味的に分節されることはないので、これらの語に具体性が欠けている、という感じは否めないかも知れない。私たちは、あまり長い語が不透明で分析不可能であるとき、どうしても我慢ができず、いくつかの有意味な部分から構成されるように再解釈しがちであるが、前述したように民間語源が生じることになるのは、正にこの理由による。

先ほど述べた詩的美に関連して Leisi は、ドイツ語では分離が起こらない透明な語が慣習化してしまった場合の意味と語源的な透明性を大切にしたい意味との間を漂う、というのが文学上の最大の美しさの一つである、と述べている。(14)はドイツの詩人 Rainer Maria Rilke の詩の一節で、和訳すると、「いちじくの木よ、なんじがその花をほとんど咲かせずにすませてしまうようすは、何と昔から、私には意味深長であったことか」となるが、下線部 *bedeutend* は単なる「重要な」という意味ではなく、「……にとって意味を持つ、意味深長である」という意味であることが興味深い。従って、英語の訳語としては *important* とするより、*significant* を充てる方がよく、事実、インターネットで見られるオンライン版の Hunter という人の英訳(15)では、その通りの訳になっている。この語は *signify* に *-ant* がついたものなので、そのように訳すことで「意味を持つ」という原義のニュアンスが伝わるからである。

(14) Feigenbaum, seit wie lange schon ists mir bedeutend,
wie du die Blüte beinah ganz überschlägst (Rilke, *Duineser Elegien* 6)

(15) Fig tree, I've long found it significant
that you omit, almost entirely, to flower

(Robert Hunter 訳, オンライン版.)

[http://www.dead.net/RobertHunterArchive/
files/Poetry/Elegies/elegy6.html](http://www.dead.net/RobertHunterArchive/files/Poetry/Elegies/elegy6.html))

以上のことから翻訳において、目標言語が英語とか日本語のような複層的

な語彙構造の場合、どの層から訳語を持ってくるかという点でより自由度が大きく、ドイツ語のような言語と比してより多くの翻訳適性を持っていると思われる。

なお、先ほど述べた傍系形容詞について興味深い点を指摘しておきたい。筆者は現在、特にこれらの形容詞に関心を持っているが、これらは、元になる基語名詞と極めて規則的な意味関係を持っている。例えば、bovineは「牛の」、vernalは「春の」というふうに、日本語では「の」をつければその形容詞の語義になる。英語辞書においても、定義は‘of …, pertaining to …’のかたちで表されるのが通例である。¹²さらに、これらの形容詞は、通常、限定用法のみで、叙述用法がなかったり、程度性がなかったりと、極めて名詞性が強い形容詞であることが指摘されている。(16)にこれらの形容詞の名詞的な性質について示すデータを挙げる。(16a)は限定用法のみであること、(16b)は程度性がないことを示している。さらに(16c)では、これらの形容詞は等位接続の相手として純然たる形容詞よりむしろ名詞を好むことが示されている。¹³

- (16) a. bovine disease *This disease is bovine.
 vernal equinox *This equinox is vernal.
 b. *very bovine disease
 c. solar and gas heating *solar and useful heating

これらの傍系形容詞は、元来、ラテン系の言語からの借用語であるが、段々に本来語化していき、比喩的な意味を発展させていく傾向がある。従って、those students are very bovineのように叙述用法や程度性を持つようになるし、評価的な意味を帯びることにもなる。このようなbovineの意味はslow and slightly stupid（「動作が鈍く、ちょっと愚かな」）として辞書に掲載されるのが常であるが、(17)の例のorthogonal（right angle「直角」の傍系形容詞）の場合、‘statistically irrelevant’（「統計的に関連性のない」）という語義を掲載している辞書は、調べた範囲ではOxford English Dictionaryのみであった。

- (17) To conclude, the disambiguating tests ... apply equally well to constructions with derived and underived head nouns and to those relational and qualitative attributes. Thus these distinctions are orthogonal to the matter of scope.

Beard (1991: 200)

英語には形容詞を作る語形成が非常に少ないことから、傍系形容詞が本来語化していく過程で評価的な意味を発展させ、無標の形容詞に転化していくという事実は、英語学が翻訳に、あるいは翻訳が英語学に新たな視点を提供できる可能性を多いに示している、と筆者は考えている。

湯浅茂雄によると、日本語においても評価的な意味は「美しい」、「楽しい」、「悪い」、「大きい」「小さい」などの本来的な形容詞と関係が深いの対して、「...的な」といった漢語に由来する形容動詞を用いて「植物的な」、「建築的な」、「音響的な」といった場合は、評価的な意味が薄らいでいるという。

形容詞の本来語化と評価的な意味の進展は、非常に面白いトピックで、翻訳についてもいろいろな問題を指摘することができる。例えば、かつて湾岸戦争時、誤爆で米軍に犠牲者が出たとき、collateral damage という言い方がなされたことがある（映画にもなった）。このことばを日本語に訳した場合、「付帯的損害、付随的被害」という漢字で充てることで、為政者側のしらっとしたニュアンスが伝わるのは、英語と同様日本語の強みであると筆者は考える。なお、ドイツ語で対応する表現は、何と collateral の部分に英語をそのまま借用した Kollateralschaden であるという（Jürgen Bulach による指摘）。

4. 本論の総括, その他

本論での議論を総括する。

まず、最近の英語学が、自然科学的な色彩を強めていることについて本論で指摘した上で、個別言語の媒介変数という視点が、言語間の修飾語と主要語の順序、といった問題に光を投げ掛けていることを、直喩の型を例に取り上げて指摘した。

第二に、英語学の人文的な研究の一例として、語彙の問題を、Ullmann や Leisi らの研究の延長線上に位置づけ、論じてみた。語彙が複層的な言語と単層的な言語では、語によって喚起される表象に大きな差があり、前者の方が翻訳適性が大きい言語であると考えられること、さらに複層的な語彙を持つ日英のような言語は、語彙層の習得が社会言語的に機能していて、階級差の基準となっていること、日本語がかなり英語と翻訳適性の面で並行性があること、などを指摘した。

筆者が特に指摘したかったのは、最近ややもすると薄れがちな言語研究の

人文的な側面が翻訳について、まだまだ貢献する分野があるという事実である。自然科学でいう「反証の可能性」を根本に据えた自然科学的なアプローチだけでなく、類推（アナロジー）といった概念を用いて人文的に研究を積み重ねていくことの意義を、翻訳という事象を通じて再確認していく必要があるのではないかと筆者には思われてならない。

最後に、Leisiの*Das Heutige Englisch*、『現代の英語』6版には、英語の語彙について以下の記述がある。ここでいう「古い食器」とは、英語の本来語の語彙層、「立派な陶磁器食器セット」とはノルマン・コンクエスト以降、入ってきたラテン系の語彙層を指したものである。

ある家族に陶器の食器がある。数は多くはないが一応十分で、立派なものである。ところで、その家族はあるとき、200個からなる立派な陶磁器食器セットを相続し、喜びのあまり古い食器の半分を捨ててしまう。しかしまもなく新しい立派な食器の使用が難しくなる。壊しはしないか、使い方を間違えはしないかと心配なのである。そこで新しい食器は戸棚の中にしまい込まれて、以後はただ日曜日にしか用いられないのである。平日には残った古い食器を使っている。そして時にはスープも肉も同じ皿で食べるという具合なのである。というのも、付け加えておかなければならないことだが、その一家は実用を尊び、単に見せかけだけのことは嫌いだからなのである。

Leisi (1974, 大泉・野入訳: 122)

人文的な英語学という視点を取りつつ語彙構造なり、翻訳について思いを巡らせるとき、筆者には上記の記述がとても意義深いと感じられる。現行のMairにより改訂された同書の第8版ではこの部分が丸々削除されてしまったが、そのような観点から誠に惜しむべきことであると筆者は考える。

注

- (1) 本論は、2005年10月29日の実践英文学会におけるシンポジウム、「翻訳をめぐる一語学・文学からのアプローチ」の際に発表したものに加筆し、訂正を加えたものである。なお、引用文中の下線は全て筆者によるものであること、本文中の人名には敬称を加えてないこと、の二点を予めお断りしておく。
- (2) 例えば、スコットランドのHeriot-Watt大学のIan Masonらはこの新しい研究分野の発展に寄与している。
- (3) 主要語とは、当該の言語単位を構成する構成素のうち、その言語単位の性質を決定

するものことである。例えば、in the houseという前置詞句では、前置詞inが全体の句が前置詞句であることを決定しており、主要語である。

(4) Leisiは分離について以下のように述べている。

[...] oralやtripodの語は語源的な（音声上及び意味上有縁な）親族に属さずに孤立していて、いわば非社会的なのである。語を非社会化しようとする方向に進む発展およびその発展によって到達した状況を、これから「分離」と呼ぶことにする。Leisi (1974, 大野・野入訳：92)

上記の引用箇所「語源的な（音声上及び意味上有縁な）親族」とあるが、これは「形態論的な派生関係」を意味していると思われる。このように、派生関係にある語が一種の「親族」（本文中ではFamilie (Leisi, 1974: 58)とある）と捉える点は、Leisiの語彙研究がWeisgerber (1963)の流れを汲んでいることを示している。しかしながら、何をもって派生関係と捉えるかについては、必ずしも統一的な見解が存在する訳ではないことに注意。

- (5) 例えば、Finkenstaedt and Wolff (1973: 161)に、[...] father and paternal are not consociated because their relationship via an Indo-European **patér* — is only known to the philologist, who cannot be taken as the representative “average speaker.”とある。
- (6) Lewisの翻訳については楠本 (2001) が詳しいが、主に(9d, e)のようなことば遊びが翻訳でどう扱われているかの検証に留まっており、本論のような英語に見られる分離現象を日本語訳でどのように処理しているかについては考察されていない。
- (7) それぞれ、字句通りには「幅の程度」、「長さの程度」の意味になる。
- (8) Teile der Erdeは字句通りには「地球上の相対する部分」という意味である。
- (9) 山形の「あるぜん人」は地球上の日本の対蹠点であるアルゼンチンとかけたものであろう。
- (10) 例えば、Denning and Leben (1995: 7-8)を見よ。
- (11) 「グノモン」とは「平行四辺形の一角を残してその相似形の平行四辺形を取り去った形」を意味する。
- (12) 形態論的に何らかの名詞を基語にとり、‘of, or pertaining to ...’ (...は基語名詞) という意味を持つ形容詞を関係的形容詞 (relational adjectives) と呼ぶ。傍系形容詞は関係的形容詞の真部分集合を構成する。
- (13) 関係的形容詞の名詞性は、これらの形容詞に基語名詞に由来する、「弱い指示性」があるためだと考えられる。「弱い指示性」というのは、これらの形容詞が、the Italian invasion of Albaniaのように動詞的なものの項として「タイプ指示的」に (type-indicating) 機能できるが、self-anaphoraなどの先行詞として「個体同一的」(token-identical) に機能することはできない (*the Albanian_i destruction of itself_i) からである。これは、関係的形容詞の基語名詞が限定詞を含まないことと関係があると思われる。これに対して、限定詞を伴う名詞句に接辞として付加される所有格-'sには強い指示性があり、self-anaphoraの先行詞として個体同一的に機能することが可能 (Albania's_i destruction of itself_i) である。詳しくはKoshiishi (in progress)を参照のこと。

参照文献

- Beard, R. (1991). "Decompositional composition: the semantics of scope ambiguities and 'bracketing paradoxes'". *Natural Language and Linguistic Theory* 9: 195-229.
- Denning, K. and W. R. Leben. (1995). *English vocabulary elements*. Oxford: Oxford University Press.
- Finkenstaedt, T. and D. Wolff. (1973). *Ordered profusion: studies in dictionaries and the English lexicon*. Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- 福井直樹. (2001). 『自然科学としての言語学』. 東京：研究社.
- Grove, V. (1949). *The language bar*. London: Routledge.
- 楠本君恵. (2001). 『翻訳の国の「アリス」——ルイス・キャロル翻訳史・翻訳論——』. 東京：未知谷.
- 郡司隆男. (1988). 『言語科学への招待』. 東京：丸善.
- Joyce, J. (1977). *Dubliners*. Frogmore, St Albans: Granada Publishing Ltd.
- 加島祥造, 志村正雄. (1992). 『翻訳再入門』. 東京：南雲堂.
- Koshiishi, T. (2002). "Collateral adjectives, Latinate vocabulary, and English morphology". *Studia Anglica Posnaniensia* 37: 49-88.
- Koshiishi, T. (in progress). *Collateral adjectives and their related problems*. PhD thesis to be submitted to the University of Edinburgh.
- Leisi, E. (1974). *Das heutige Englisch*. Heidelberg: Winter. [Sechste Auflage]. 大泉昭夫, 野入逸彦 (訳). (1987). 『現代の英語』 東京：山口書店.
- Leisi, E. and C. Mair. (1999). *Das heutige Englisch*. Heidelberg: C. Winter. [Achte Auflage].
- Lewis, C. (1965). *The annotated Alice*. Harmondsworth: Penguin Books. [Annotated by Martin Gardner.]
- Pyles, T. and J. Algeo. (1968). *English: an introduction to language*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- Ullmann, S. (1962). *Semantics*. New York: Barnes & Noble.
- Weisgerber, L. (1963). *Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen*. Düsseldorf: Schwann.